

「満州及び北鮮から帰還した同胞の体位並に栄養状態に関する統計学的研究」（第二報 北鮮同胞）

三輪, 宗弘
九州大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4475429>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 36, pp.117-123, 2021-03-25. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン :
権利関係 :

【資料紹介】「満州及び北鮮から帰還した同胞の 体位並に栄養状態に関する統計学的研究」（第二報 北鮮同胞）

三 輪 宗 弘

解題

古本屋から入手した「満州及び北鮮から帰還した同胞の体位並に栄養状態に関する統計学的研究」（第二報 北鮮同胞）はどこにも所蔵されていないことがわかった。国立国会図書館、奈良県立図書情報館、CINJなどの検索サイトで題目（タイトル）や「厚生省博多引揚援護局」と入力して検索をかけたが、ヒットがなかった。第一報の題目は「満州及び北鮮から帰還した同胞の体位並に栄養状態に関する統計学的研究」（第一報 錦州地区）であると註1に書かれている。第一報の原本も所在を突き止めることはできなかった。

Wikipediaから「咸鏡南道」を素描すれば、以下の通りである。

現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の咸鏡南道と江原道の一部である。道庁は咸興に置かれた。朝鮮の東北部、咸鏡道地方の西南側にあたり、東北に咸鏡北道、南に江原道、南西に黄海道、西に平安南道・平安北道に接する。北には鴨緑江上流部を隔てて満洲と隣接する。最北

端に白頭山を擁する。咸鏡道は、李氏朝鮮の行政区分・朝鮮八道の一つであった。一八九六年に咸鏡北道と咸鏡南道に分割された。

咸鏡南道には日本窒素の主要工場である「興南工場」があり、主に硫酸肥料を製造していた。「本宮工場」ではカーバイドが主要製造品であった。アルミニウム工場やマグネシウム工場等も操業していた。また咸鏡北道には永安工場、阿吾地工場があった。¹阿吾地には石炭液化工場やメタノール工場があった。²鎌田正二『北鮮の日本人苦難記——日窒興南工場の最後——』（時事通信社、一九七〇年）は日本窒素の社員と家族が敗戦に伴い、どのように北朝鮮から帰国したのかに関する壮絶な記録である。¹⁰「咸北避難民」（九八〜一二六頁）に悲惨な光景が描かれている。

鎌田正二は『日本窒素史への証言』³を編集され、第一集から第三〇集まで刊行された。さらに続巻第一集から第一五集を編集された。ぜひ紐解いていただきたい。関連する図書として、ヨココ・カワシマ・ワトキンズ『竹林はるか遠く——日本人少女ヨココの戦争体験記』（ハート出版、二〇一三年、都竹恵子訳）も一読に値する。記憶の間違いは多々あるだ

ろうが、韓国では、加害者の日本人が被害者になっているという点が問題とされた。坂口陽子『海草の旗——わたしの引揚げ記録——』（非売品、平成一八年）は、親が先に帰国を急がせた姉（高等女学校二年）妹（小学校五年）が満州の奉天市から朝鮮の三八度線を歩いて渡り、京城、仁川を経て、船に乗り込み佐世保上陸、有田駅を経て、伊万里駅にたどり着いた。父母と奉天駅で別れてから一年二か月かけて父母との涙の再会までが綴られている。貴重な回想録であるが、九州大学中央図書館と伊万里市図書館に所蔵されているだけである。森田芳夫『朝鮮終戦の記録 米ソ両軍の進駐と日本人の引揚げ』（巖南堂書店、昭和三九年）も手に取らしたい。

資料の解説に戻る。咸鏡北道と咸鏡南道からの博多港への引揚者がそれぞれ六六六（男二九〇、女三七六）人、一九二五（男八五四、女一〇七一）人と多い。隣接する東満州（朝鮮に近接した石硯地方在住者又は同地への避難者で、之が集団となつて咸鏡南道の咸興に脱出して来て、しばらくこゝに滞在してゐたもの）からの引揚者は、第一表の「東南満州」であろうが、一八五（男七七 女一〇八）人となっている。脱出経路は「汽車を利用して北緯三八度線附近に至り徒歩で米国軍占領地域に出、京城、釜山間は汽車により、釜山から乗船したものである。」と書かれている。ソ連支配下と米軍支配下の境界である三八度線を超え、京城まで歩き、汽車に乗り、釜山に向かい、釜山から博多港まで船で帰還したのであろう。

中国・西側の満州からの引揚者は朝鮮の平安北道一〇九（男一三、女九六）人には向かわずに、葫蘆島と大連に向かい、そこから日本に引き上げたのだらう。北朝鮮を経由した引揚者の総数は三一九六（男一四七

二、女一七五）人で女性の方が多いことが読み取れるが、ソ連の支配下に置かれたため、その前に先に引き揚げたのか、何らかの理由で抑留されたのであろう。中には兵隊として戦地に赴いた人もいたであろう。男女比で見ると平安南道だけが男が多いのが特筆される。一八六名中、男が一二六名で女性が六〇名である。

年齢構成で眺めると、20歳から30歳まで男女比で男が少ないのは徴兵年齢と関係しているのだらう。17歳18歳の男女比が「四七人対二八人」が示すように、兵役法に基づく徴兵年齢と密接な関係があるのだらう。44歳45歳以上から男性の割合が高まるのは、昭和一八年一月の兵役法改正で45歳まで兵役が延長されたことと何らかの関係があるはずである。

第一図「北鮮より脱出者の人口構成」（一九四六年五月一日―六月一日上陸）によって、年齢別の男女の構成比が一目瞭然である。

北朝鮮からの引揚者に関して以下のような考察を加えている。

「その結果は略々錦州地区（満州）のそれと類似してゐることが窺はれる。即ち

- (1) 幼児就中0〜5才間が甚しく少い。
- (2) 男子にあつては15〜20才間が欠けてゐる。之は終戦前に於ける召集、終戦後に於ける強制労働のための抑留を物語るものであるかもしれない。
- (3) 女子の15〜20才間が欠けてゐる理由は明らかでない。或は見本の偶然が原因としてゐるものかとも思はれる。」

また身長に関しては、以下のとおりである。

「満6〜18才迄の発育期に於ける男子では本資料が錦州地区日本人に比べても劣り、内地日本に比較すれば勿論3〜12歳の大きな減少がみられる。女子でも錦州地区日本人及び内地日本人に劣つてはゐるが、その差異は男子に於ける程ではない様である。」

体重に関しては次のように書いている。

「男子に於て満6〜18才を見るに内地日本人よりは勿論錦州地区日本人よりも体重の減少がある。殊に15、16、17才の差は激しい様である。女子に於ても本資料は内地日本人及び錦州地区日本人よりも減少してゐる。」

第二図、第三図、第四図で「身長」、「体重」、「比重」の「北鮮より脱出の日本人」「錦州地区より引揚の日本人」「内地在住の日本人」のグラフでのプロットが示され、北朝鮮から博多に帰還した6歳から18歳までの日本人の発育状況が満州地区の引揚者よりも悪かった、つまり栄養状態が劣悪であったことを反映しているのであろう。

総括して「身長、体重及び比体重だけから栄養状態を推察すれば本資料の発育期に於けるものは大略1年の発育遅滞がある様である。」と、北朝鮮からの引揚者の栄養状態がよくないかつたことが指摘されている。

注

- (1) 堀和夫『朝鮮工業化の史的分析』(有斐閣、一九九五年)二五五〜二六五頁。
(2) 永安には宇部窒素工業のルルギ式低温乾溜工場があり、阿吾地には朝鮮

石炭工業の直接石炭液化の工場があった。後に朝鮮人造石油阿吾地工場は昭和一八年五メタノール生産に転換された。人造石油事業史編纂刊行会『邦人造石油事業史概要』(非売品、昭和三七年)五頁、二六頁。大塩武『日窒コンツェルンの研究』(日本経済評論社、一九八九年)一五四〜一五五頁。
(3) 『日本窒素史への証言』全四十五集(三十集・続卷十五集)総目次は『日本窒素史への証言』(続卷第十五集、平成四年、二一六〜二二五頁)に掲載されている。敗戦にともなう引揚やソ連抑留、日窒の事業展開を知る上で、貴重な回想である。東京都立中央図書館、大阪府立中央図書館、熊本県立図書館、九州大学中央図書館などに45冊すべて揃っている。

付記 一部、旧字体を新字体に改めた。「横書き」も「縦書き」に変えた。

満州及び北鮮から帰還した同胞の体位
並に栄養状態に関する統計学的研究

第二報 北鮮同胞

厚生省博多引揚援護局
在外同胞援護会救療部

目次

1. 資料
2. 身長
3. 体重
4. 比体重
5. 総括

1. 資料

本報告は1946年5月19日から6月11日に亘る間博多港に上陸した北鮮からの脱出者3、196名の計測値である。材料の整理は第一報（註1）と同様である。

脱出経路は主として汽車を利用して北緯38度線附近に至り徒歩で米國軍占領地域に出、京城に集結、京城、釜山間は汽車により、釜山から乗船したものである。

原住地を地方的に分類すると第一表の通りである。

第一表

地方別	性別		計
	男	女	
咸鏡南道	854	1,071	1,925
〃北道	290	376	666
平安南道	126	60	186
〃北道	13	96	109
黄海道	19	20	39
江原道	15	24	39
東南満州	77	108	185
其他	27	20	47
合計	1,421	1,775	3,196

このうち東満州とあるのは主として朝鮮に近接した石硯地方在住者又は同地への避難者で、之が集団となつて咸鏡南道の咸興に脱出して来て、しばらくこゝに滞在してゐたもので、葫蘆島經由で現在帰還しつつ、あるものとは各種の条件が異なるから、本資料の中に含めた。
次に資料を年齢別に分類すると第二表の通りである。

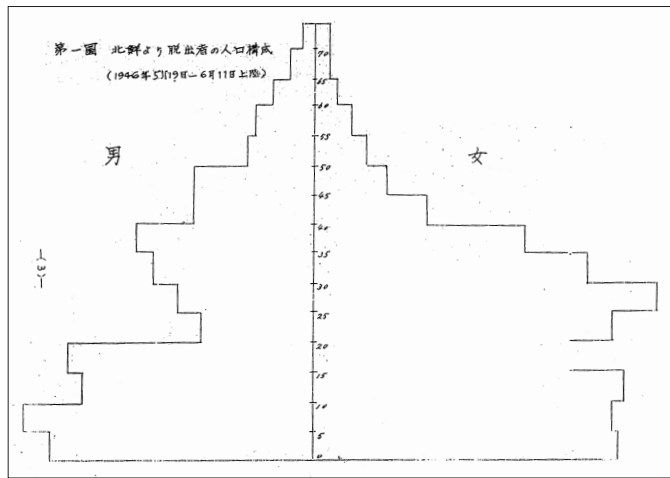
第二表

年 齡	男	女	年 齡	男	女
0～1	26	32	27～28	14	45
1～2	36	39	28～29	17	50
2～3	32	39	29～30	33	46
3～4	32	42	30～31	25	28
4～5	52	52	31～32	28	40
5～6	51	48	32～33	20	34
6～7	36	30	33～34	24	34
7～8	37	32	34～35	12	36
8～9	39	36	35～36	24	31
9～10	35	50	36～37	27	34
10～11	38	43	37～38	24	27
11～12	30	47	38～39	26	31
12～13	43	35	39～40	18	20
13～14	34	41	40～41	18	17
14～15	31	40	41～42	16	22
15～16	31	39	42～43	20	21
16～17	19	27	43～44	14	18
17～18	47	28	44～45	12	7
18～19	30	37	45～46	21	8
19～20	40	41	46～47	11	12
20～21	24	32	47～48	18	17
21～22	12	28	48～49	20	13
22～23	15	51	49～50	10	8
23～24	12	47	50～51	11	8
24～25	14	41	51	136	99
25～26	13	43	合 計	1,421	1,775
26～27	14	49			

今第二表により5才階級別人口構成を作製すると第一図の通りである。勿論本資料は脱出者全員ではなく、一種の見本にしすぎないが、その結果は略々錦州地区（満州）のそれと類似してゐることが窺はれる。即ち

- (1) 幼児就中0～5才間が甚しく少い。
- (2) 男子にあつては20～35才間が欠けてゐる。之は終戦前に於ける召集、終戦後に於ける強制労働のための抑留を物語るものであるかもしれない。
- (3) 女子の15～20才間が欠けてゐる理由は明らかでない。或は見本の偶然が原因としてゐるものかとも思はれる。

尚本資料の比較に當つては第一報に発表した錦州地区より引揚の日本人及び内地在住の日本人のものを使用した。そして前報告と同様6才以上のものに就いての成績を発表する。



(註1) 満州及び北鮮から帰還した同胞の体位並に栄養状態に関する統計学術的研究第一報 錦州地区

2. 身長 (第三表参照)

満6～18才迄の発育期に於ける男子では本資料が錦州地区日本人に比べても劣り、内地日本に比較すれば勿論3～12歳の大きな減少がみられる。女子でも錦州地区日本人及び内地日本人に劣つてはゐるが、その差異

は男子に於ける程ではない様である。

次に各年齢階級をみるに男女何れも年齢増加と共に身長は増大してゐるが、男子では20才以後は増減僅少で、女子では19才を最高に年齢増加に従つて僅か乍ら身長は減少がある。

本資料の男女に就いては、満10～14才の女子が同年齢の男子より僅か乍ら優れてゐる。大略正常な現象である。

3. 体重 (第四表参照)

男子に於て満6～18才を見るに内地日本人よりは勿論錦州地区日本人よりも体重の減少がある。殊に15、16、17才の差は激しい様である。

女子に於ても本資料は内地日本人及び錦州地区日本人よりも減少してゐる。

次に男女を比較すれば満13～17才於て、女子が同齡の男子よりも体重大である。

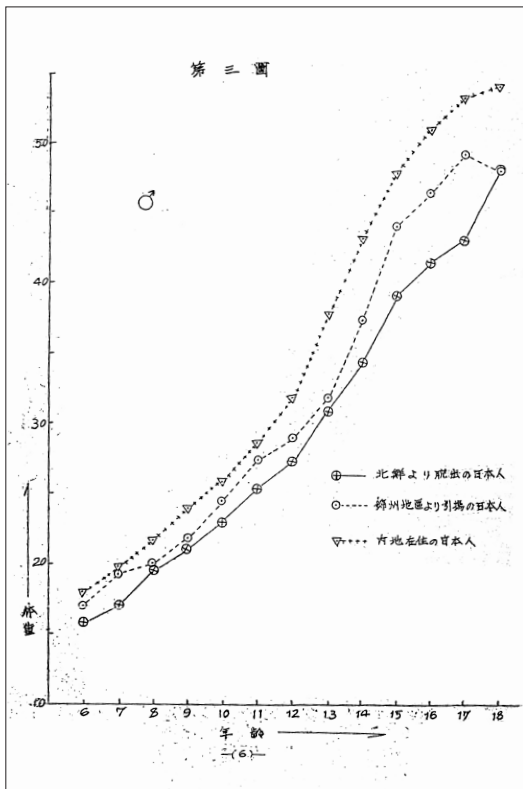
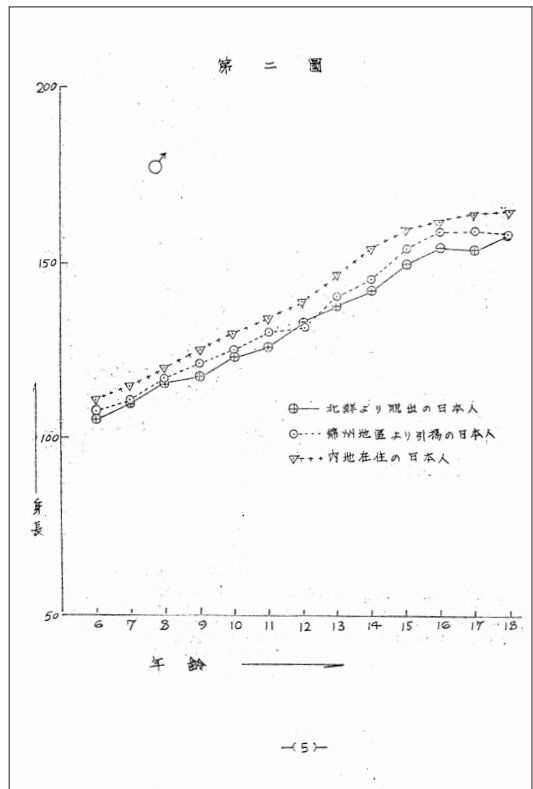
尚19才以後の男子に於ては体重の増減は僅かであるが女子に於ては19才と20才を最大として、それ以後は年齢増加と共に体重は減少してゐる。

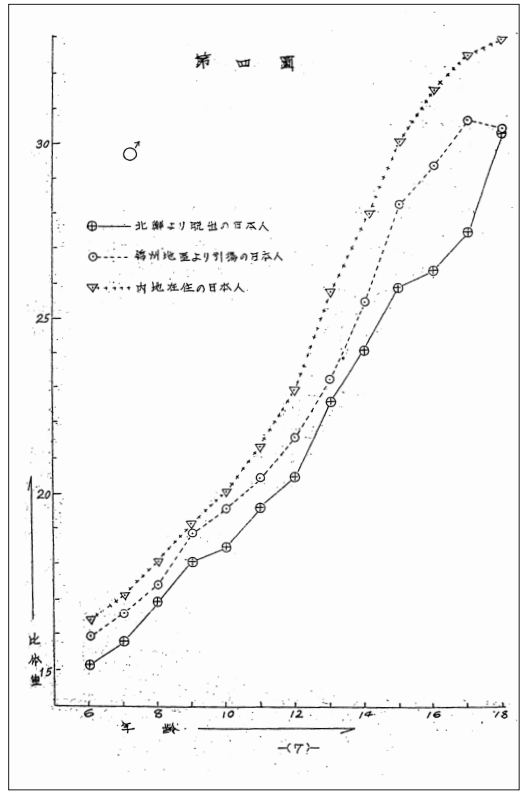
4. 比体重 (第五表参照)

発育期に於ける満6～18才迄のものについてみるに、本資料は男女共に錦州地区日本人より小さく、尚内地日本人よりは更に小である。

本資料が既述の如く身長体重何れも、錦州地区日本人及び内地日本人に劣るため、それらの比が小となるのは当然であらう。

本資料は錦州地区日本人より小、内地日本人よりは更に小さい。





5. 総括

北鮮脱出者3196人の身長、体重及び比体重の平均値を計算せる。成績より以下の如きことが推定される。

本資料は各年齢階級に於ける例数が不充分であり従つて誤差が大きいが大略第一報錦州地区定住者に於いてみられる如き傾向が窺はれ、しかも身長、体重及び比体重何れもそれより劣つてゐる様である。

即ち身長は満6〜18才迄の発育期の男子に於て、本資料が錦州地区定住者及び内地在住日本人何れよりも劣る。女子に於ては男子に於ける程ではないが、これ亦兩者何れよりも小である。

各年齢階級に於ては男女共に年齢増加につれて身長が増加する。そして男子では20才以後は増減少く、一方女子は年齢増加と共に身長が僅少

ながら減少する。

尚満10〜14才の女子が同年齢の男子より僅かながら大きい。略々正常な現象である。

次に体重は満6〜18才に於て男子では内地在住日本人よりは勿論錦州地区定住者よりも減少し、殊に15〜16、17才に於ける差は著しい。同様女子に於ても両比較資料より劣つてゐる。本資料の男女を比べれば満13〜17才に於て女子が同齡の男子より体重が大きい。

19才以後の男子は体重の増減少く、女子は年齢増加と共に体重は減少する。

尚比体重は発育前に於ける満6〜18才迄のでは男女共に錦州地区定住者より小さく、なほ内地日本人よりは更に小である。それは本資料の各年齢階級に於ける比体重が内地在住日本人のそれに比較して大略1才は遅れてゐる様である。

以上を概括して、身長、体重及び比体重だけから栄養状態を推察すれば本資料の発育期に於けるものは大略1年の発育遅滞がある様である。